第 5 回大学院生のための中欧言語学会議に参加して

光井明日香（東京外国語大学大学院博士後期課程）

2015 年 9 月 4 日～5 日にチェコ、オロモウツのパラツキ―大学にて開催された、第 5 回大学院生のための中欧言語学会議（CECIL'S 5, 5th Central European Conference in Linguistics for Postgraduate Students）に参加した。本会議は 2011 年にハンガリーのパズマニ―ペーテルカトリック大学にて第 1 回が行われ、そこから 3 年に渡って同大学にて開催されていたが、2014 年に初めてハンガリー以外（ポーランド）にて開催された。パラツキ―大学での開催はハンガリー以外での 2 回目の開催ということになる。会議の目的は、様々な研究領域の言語学専攻の大学院生に発表と討論の場を与え、学生同士を結びつけることである、とされている。言語学や言語学に関係する研究分野の大学院生は誰でも応募をすることができる。そのため、研究発表は記述的なもの、生成文法や形式意味論などを用いた理論的なものだけでなく、第二言語習得や第二言語としての英語の教授法に関するものと多岐にわたった。

第 5 回大学院生のための中欧言語学会議には数名の欠席者はいたが、プログラムに掲載されているだけで口頭発表での参加者が 24 名、ポスター発表での参加者が 11 名であった。多くはチェコ、ポーランド、ハンガリーからの参加であり、他にトルコ、ギリシャ、ノルウェー、デンマーク、ルーマニア、アメリカ、セルビア、台湾からの参加者がいた。日本からの参加者は筆者だけであった。4 日は開会式の後、Pavel Caha 教授による招待講演があり、教授本人がフィールドワーク調査によって収集されたバントゥー語群のショナ語やガンダ語の locative の例をもとに、形態素というカテゴリーに関する興味深い話を聞くことが出来た。コーヒーブレイクを挟んで研究発表が行われ、その後は昼食とコーヒーブレイクを挟みながら夕方の 5 時まで研究発表が続き、コーヒーブレイクの間にはポスターによる発表も行われた。夕方からは Jakub Dotlačil 教授による「自己ペース読み（self-paced reading）」のオンライン実験に関するワークショップが開催された。どのように実験を行うのか、という具体的な説明や、実際に講演者の作成した「自己ペース読み課題」をオンライン上で見ていくつかの実験も見ることが出来た。パソコンなどインターネットにつながる機器をその場で持っている参加者は講演者の示したアドレスから実際にオンライン上で実験に触れることも出来た。

5 日は午前中に Klaus Abels 教授による招待講演があり、ellipsis に関する理論的なアプローチについて興味深い話を聞くことが出来た。その後コーヒーブレイクを挟んで研究発表が行われた。4 日と同様にコーヒーブレイクの間にはポスターによる発表も行われた。筆者は欠席者によるプログラム変更などで 5 日の最後に発表となった。発表の内容はロシア語における女性も指示することが出来る第 1 変化の男性名詞、第 2 変化の男性名詞と不変化の男性名詞がより男性名詞的なものから女性名詞的なものへとある種のグラデーションを

描いている、というものである。2014 年 11 月 2 日に山形大学で開催された日本ロシア文学会第 64 回大会にて発表した内容を、司会者の先生、会場の方からのご助言を踏まえてより整理し発展させた上で、発表時間に合うように短縮したものを今回の発表とした。発表の後の質問では、パラツキ―大学の教授より発表の本質とは関係のない質問をされてしまい、ロシア語の数詞と名詞の結合（2, 3, 4 とは単数生格が結合するなど）について説明しただけで時間がいっぱいになってしまった。今後は発表の中でもう少しロシア語を知らない人にもわかるような説明を心がけようと反省した。だが、研究発表が終わった後の懇親会でセルビアの学生から、セルビア語における興味深い例を教えてもらい、また方言や他のスラヴ諸語についても研究した方がいい、というアドバイスもいただいた。

研究発表と招待講演を通して、記述的な研究よりも生成文法からのアプローチや形式意味論からのアプローチなど理論的な研究が多いという印象を受けた。筆者は普段記述的な研究を中心に行っているので、自分の研究も理論的に考えていかなければならない、と改めて感じるなど刺激を受けた 2 日間であった。旅費を助成してくださった日本ロシア文学会に心から感謝申し上げます。

写真：パラツキ―大学の外観